

つれづぎのゆで



一一一
文芸部
部誌
秋冬號

おべかわ

「今回の結婚式は、文部省よりアシスタントが無いなつてこもったからこじり、秋號の出版が、二つの間にか、外處の時限になつてしまつた。そのつゞく、巻頭のコレ一小説に附つてしまふ『賣織つ』――おひたし文部省の面々の朱に交わつて、自分自身の、お世話になつたやうだな……。

「おお、簡単には思ひつけなかつたや。懶けやうぢや、おまえが読むた
い、怠けつや。伊豆の山からくる、おなじおやじの手紙を書いたやうだ。
「とにかくおまえがやつれません。表現するといつては、そんな伊豆の山にしたまつた物つてやうで、醜い
やうで、田舎者たゞや、そこへいたまび、業つこもる、なんばものだがや
言葉や絵や、句か形にあらねども、心を傳へある作業だと思つてお。
「しかし、その言葉が、回つめのじゆうじゆうんだもつたやのねほの出でよ
いで知つてつづつやうだの……、何かしなねばあいわう。

『結婚式』
了。

コレ一 小説（夏祭り）

いつもは回覧板なんか見ない俺が、ポストから少しはみ出していた回覧板に手を伸ばしりと覚えていた。

「父さん、今年は夏祭りやるらしいよ。」

昨年はなんやら事件があつたそうで、急遽中止になつた。俺は父さんに事件のことを何度も聞いたらことがある。でも、父さんは「俺はよく知らない」としか言わなかつた。

そいつはそこじやねーよ！ もたもたすんじやねえ

父さんが実行委員だつたから、俺は祭りの準備に連れてこられていた。準備初日にもかかわらず、監督さんが怒鳴り散らかしている。いつもは優しい口調で話しかけてくれる監督さんは祭りとなると人が変わるらしい。父は倉庫から単管を運び出すという仕事を任せられていた。

「高橋さんとこも単管でつか。」

倉庫に向かつていると山崎さんが声をかけてきた。

「そうですねん。そういうへうで監督さんが怒鳴つてましたけど、何かありました？」

「わしもようわかりませんねん。」

電気もなく薄暗い倉庫にはすでに人が数人いた。もう半分以上運び出されていたので我々は急いで作業に取りかかつた。

少しすると、監督さんが息を切らしながら走つてきた。

「おい、花火の管理は今どうなつてる？」

息を切らした監督さんはその場を見回して問う。

そのあまりの必死な顔に驚きながらも全員が何も知らないと首を横に振つた。この倉庫には単管しかないし、俺は花火を見られるなんて初めて知つた。

監督さんは長く息を吐いて「そうか」と安堵の表情を覗かせる。

そんな中でふと監督さんと目が合つて、「やあ、高橋さんのとこの息子さんじやないか。大きくなつたもんだ」と優しく目を細めて言われた。

先程の必死な表情は跡形もなく消えていて、あるのは優しい笑顔だ。俺がそれにちょっと

驚いていると父が援拶しようと顎で促したので、俺は頭を下げて「おはようございます」と言つた。

「あつちもあつちも人手が足りないよ。最近は子どもたちがあまり外に出ないから、余計に足りないんだ。君みたいな若手がいてくれると助かるよ」

「夏祭り、楽しみにしてるので。何か手伝えたらと」

監督さんは嬉しそうに頷いて、よくできた子だと俺を褒める。

父に聞いた話では、監督さんは教師をしていたらしい。もしこの人が俺の担任だつたら学校に行くのもそんなに億くないだろうなあ、なんて考えながら監督さんと話していると、父が「そうだ、せつかくなんでコイツ連れて行っていいですよ。いろいろ教えてやってください」と言い出した。

俺はよく知らない人と一緒に行動することに一瞬怯んだが、まあこの人なら話しやすそうだしと了承した。

「そうか。ではお借りするね」

「ちよいちよい」と手招きされて俺は監督さんの後について行つた。



「あの、どこに行くんですか？」

「会館の倉庫だよ。入った事あるかい？」

「あー…、ないですね」

会館は、この地域の役員会や子供会、老人会などで使われている。その隣にある倉庫は絶対に入るなどと言われていたし、鍵がかかっていたから入りたくても入れなかつた。

「そうか、じゃあ初めてだね」

監督さんは穏やかな口調で言つた。それを聞いて俺はこの人なら聞けるかも、と疑問をぶつけてみることにした。

「監督さん」

「うん？」

「去年、夏祭り無くなりましたよね。何かあつたんですか？」

ピクッと僅かに監督さんの肩が動いた気がした。

「ああ、君が気にする必要ないよ。たいした事では無かつたしね」

なんだか納得のいかない返答であつた。絶対何か知つていてる。そう踏んで口を開こうとした時、

「監督さん」

静かなでも良くなれる声が後ろから聞こえた。振り向くと、長い黒髪を一つに束ねたお姉さんが立つていて。

「おお、小夜子(さよ)ちゃんじゃないか。帰つて来てたんだね」

「ご無沙汰します。夏休みなので、暫くこっちに居ようかなつて。今日はお手伝いに来ただよ」

「でも良くなれる声が後ろから聞こえた、振り向くと、長い黒髪を一つに束ねたお姉さん立つていて」

「もちろん。人は多い方がいいからね」

俺は軽く小夜子さんに挨拶をすると、監督さんは鍵を取り出して倉庫の鍵を開けた。

倉庫の中には段ボールがたくさん置いてあつた。

「監督さん?・これは?」

俺はついこれが何なのかが気になり聞いてみた。

「花火だよ、今年の分のね。」

「もしかしたらこれが最後の花火になるかもしれないけどね。」

小夜子さんがさらりとそんなことを言つ、どういうことだ?

「小夜子ちゃんそれは!」

「えつ…もしかして言つちやんかった?」

少しの沈黙が訪れる。俺は思い切つて聞いてみることにした。

「それって、どういうことですか?監督さん。」

監督さんは少し言うのためらつてやがて口を開いた。

「この夏祭りでの打ち上げ花火は実はわたしの知り合いが特別に作つていてるのでね、一年ほど前に夏祭りが急遽中止になつてしまつたのはその人が亡くなつてしまつてね…。」

「ちょうど一年ほど前に大雨の影響で山の方で土砂崩れがあつてね、その人が作業小屋が埋もれてしまつたんだ、その作業小屋からなんとか持つてこられたのがこの倉庫にある分だよ。」

「今年の花火にこれらを使おうと思つてね。」

俺はふと思つたことを聞く。

「その花火、残しとかないんですか?」

俺はあつ…まずかつたか?、と監督さんはその質問について。

「あはは、逆だよ…もともと去年打ち上げる予定だつたんだ…打ち上げてやつたほうが私にできる」ことでその人にとつてもいいと思つてな。」

そんな考え方もあるのかと思ひ手伝いを始める。手伝いは花火の個数の確認だつた。

俺、監督さん、小夜子さん

花火の数に問題はなかつたので倉庫から出て小夜子さんが監督さんに聞いた。

「監督さん、この後はどうします?」

監督が口を開く前に薄汚れたポケットが震えて音をたてた。「ちょっと失礼、電話だ」と携帯

で話す彼のは遠巻きにみてもあの厳格な顔に戻つてゐる。「面白いよね、あの人。」セミの声が響く。「毎年來てるんですけど?」「うん、もう五、六年手伝つてるよ。」「…好きなんですね、夏祭り。」「んふ。」小夜子さんは少し吹き出しておいてあつた丸いすに座つた。「…もう今年で終わりだけね。」笑顔ではあつたがもう雲つてゐるように見えた。夏祭りが、ですか。」小夜子さんは何も言わずに頷いた。またセミの声だけが響く。しばらくして監督がもどつてきた。「すまん。待たせたね。」そのあとは公民館の中で作業をしていた。夕方

を回り、昼間に来たときより涼しくなっていたので辛くはなかった。「高橋くんも小夜子ちゃんも、今日はありがとう。もうすぐ暗くなるからもう帰つたほうがいいよ。」監督はまだまだ忙しそうだった。祭りにかける情熱が彼をあれだけ動かしているのだろう。「あの、来年は夏祭りしないんですか?」監督はもう背中を向けていたが、振り替えて答えた。「そいつもりだね。」「俺、したほうがいいと思いますよ。監督たって、やりたいでしょ?」小夜子さんの目を丸くした顔がちらつと見える。しかし、でしゃばりであろつとは承知の

上での発言だつた。

「だひー、ほん地域の夏祭りなんか一度辞めちやうとも出来なくなるし…それに、だひてほひ、やつた方が花火作つてた人も嬉しいと思うし、それに…」

我ながら大人を納得させるような言い訳を必死に考えすぎて自分でも意味がよくわからな
い。

「だひてほひ…だひて」

「俺が言つたつて夏祭りがやれない可能性の方が高いのは分かつてる。でも、何も言わない
のは何か嫌で

「…だひて」

俺が何もせずに夏祭りが出来なくなるのは…辞めちやうと何故かダメな気がするから。

「……。」

2人はぜんぜん喋らなかつて、俺も怖くて口を合はせられない。

…ふつぶつ。

それからじれぐらい時間が経つたのだらうか…。セミの鳴き声はあぶらゼミか、ひぐらし
しか鳴いていなかつた。そんな沈黙を破つたのは小夜子さんだつた。

「…むかーしむかし。あるといろに小さな村がありました。」

唐突に昔話的なものをし始めたのだ。

「…はい?」

「その村の人々は流行病に大変困つていました。そんなある日、村人たちは神様の御力で天のお怒りを鎮めようとしました。そして神様を呼び出し、神様は摩訶不思議な御力で、流行病を止めました、ひや。」

「それって、もしかして…」

「ほ、この祭りの起源です。ですが今では祭りの起源は迷信だと言つたり、祭りに来る人も年々減つてきてますからね。なら祭りを行う必要はないだろ、そつ言う人も…いえ、そつ言う人が大半なんです。」

「あ……。」

たしかに、俺自身もお父さんが実行委員じゃなければ準備には参加してなかつたはずだ。
「それに…花火師さんも、亡くなつちゃいましたからね…。」

「…そういうことなんだよ。高橋くん。気持ちは嬉しいんだがね…。私も出来る限り大きな祭りにしようと頑張つてるんだけど、しかしねえ、さつきから人が足りないって電話がね。あ、もう一んな時間だ。君たちはもう帰りなさい。」

「……。」

俺は帰りながら、小夜子さんの言葉を思い返していた。あの言葉…、俺を納得させる為なんだろうけど、彼女の言葉がどいか彼女自身に言い聞かせてるような気がしたからだ。

翌日。

最後の祭りが始まりました。

屋台を練り回っていると、花火の準備でもしてゐるだろ？監督さんの荒々しい声が聞こえてくる。

「監督さんは忙しそうだなあ。…そういうば、小夜子さんは…どにいるんだろう？」

「…ん？？？、何かこちらの方から…」

誘われるかのように一人、神社の境内の裏側に足を踏み入れた。そして、草木を分け入つた先には大きく開けた場所があり、その中心には大きな木が立っていた。…しめ縄がされている。

「これは…御神木？？こんなところに？」

罰当たりとは分かつてはいたが、手を触れると、とても落ち着いく気分になつた。すると上から、季節外れの花びらが落ちてきた。そして見上げると、素つ頓狂な声を出してしまつた。

「…………はっ？？？？」

ひとりの女性が目に入ったからだ。小夜子さんだ。彼女も一ちらに、気づいたようで、手を振りながら、

「あ、高橋くん。一緒にここで見ませんか？いい景色ですよ。」

あれ？あれ？？と、御神木の上にいるという、かなり罰当たりな状況のせいか俺は少し…

いやすこい困惑していた。

「え、いや、いかんじよ？？だつてそ、「御神木だし…」

けど小夜子さんは、私が許可してゐるのだから大丈夫です。とか何とかよく分からぬこと

を言つていた。

言われるがままに木の上に登ると、村全体が綺麗に見渡せた。

「わあ……。すこおい。」

俺の住んでるところって、こんなに綺麗だったんだ。と初めて思った。そんな俺の横顔を小夜子さんにじっと見つめられていたことに、やつと気付いた。

「…ううどうしたんですか？俺の顔に何か付いてましたか？？」

「あ…、いえ、なんでも…。」

なんか歯切れの悪い回答だったので、首を傾げてみると、ぴゅーと、あの独特な音が響いた。花火が上がったのだ。

「あ！見てください！花火上がりましたよ！」

「綺麗ですね。生まれ生き、消えてゆく。人の運命(さだめ)のよう…。」

「え？あ、ああ。そうですね。」

花火が空高くに上がり、弾け、消える。たしかに幻想的な光景だ。

だが、それ以上に小夜子さんの透き通つた瞳に目を奪われてしまつていた。

どのくらい時間が流れたか…、数秒か、数分くらいだったか。

ただ、すぐ一瞬だったのは覚えている。花火が全て打ち上がり、静けさが戻つとした時、

小夜子さんは天に指を刺し

「――この言の葉、風となり、彼の者へ届け。」

そう聞こえた。

その時だった。とても大きな花火が上がつた。とても大きく、空より高く、天へ昇つていこうな、とても大きな花火が上がつた。

屋台の方から微かだが歓声が聞こえてきた。

その時やつと、小夜子さんが普通の人ではないのだと、確信した。

「…………くす。最後にとてもいい思い出が作されました。：高橋くん、ありがとうございます。」

小夜子さんが立ち去るうとした時、思わずその小さな手を掴んでしまつた。会つて間もないが…、その言葉がまるで今生の別れのような気がしてしまつて…。

「あ。」

「…………どうしました？」

一瞬、手を緩めてしまいそうになつたが、後悔はしたくなかったから、俺は一生懸命、言葉を連ねた。

「…か、帰――還るんですか？祭りが最後だから、この村から消えてしまふんですか？」

「…………。えつと……。そ、そう、ですね。帰る…だけですかど…」

彼女は目を逸らしていた。図星なのだろう。そう思つて更に言葉を並べた。

「俺、頑張つて祭りを開催できるよう頑張ります。村に人が戻つて来れるよう頑張ります。この村をずっと守つていきます。…………それでも、小夜子さん…『神様』は帰つてしまふのですか??」

彼女の表情はよく見えなかつた。が、意外にも笑いが溢れていた。

「…ふ、あはははは。ほんとに、君は、あはは。そんな事言われたら…、戻れなくなつてしまつじやないですか…。」

笑つてはいたが、目から涙が溢れていた。その時、自分は手の力を緩めた。

「あ…」「ごめんなさい!俺、何も泣かそうとか…！」

「いいえ、違いますよ。」

小夜子さんが逆に自分の手を握つてきた。そして顔をぐいっと近づけてきていたのだが、それ以上に泣かせてしまつたという焦りで全く認知できてなかつた。

「も、ももしかして手を強く握り過ぎましたか！？」

「それも違います…。こういう時は鈍いんですね。」

「あ、あの。神さま…?顔が近…、俺の顔に…な、何か??」

「小夜子って呼んで。」

ぐいっと圧力を感じて、しばらく状況を掴めなかつたが、小夜子さんの息遣いが耳元で感じ、自分が小夜子さんに抱かれていると、認識した。

かなり時間が経つた気がするが、流石に俺も姿勢がしんどくなり、

「さ、小夜子さん…。く、苦しいっす…。」

「あ、あれ…えつと…。私…何して…。あれ??」

どうやら、小夜子さんは自分以上に驚いてるらしかつた。

「それはこっちの言葉ですよ。」

「え?あ…そうだよね…。あ、あははは。そ、そつだ!私、屋台を見てくるね!うん!—」

また立ち去ろうとしていた小夜子さんの手を掴んだ。

小夜子さんは、恐る恐る振り返りながら、なんですか?と聞いてきたのには流石にため息が出た。これでも神さまなのか。と。

「そんなに顔が赤いと、みんなから心配されるので…」で冷ましてからでもいいんじやないですか?小夜子さん。

「あつ…。」

俺が小夜子さんと呼んだのに反応した気がした。

「う、うん、そうね!」



祭りが酣中の頃、最後の祭りということで監督さんが締めとしてみんなを集めて、挨拶を

していた。しかし、何故か物悲しい雰囲気ではなかった。

なぜなら、今年が最後の夏祭りにしたくない。と、監督さんが言つたからだ。

挨拶が終わると、たくさんの拍手に包まれた。

その先に待つてゐる運命は。

前日談？（◎～◎）

後日談（△▽△△）

祭り前日。陽が傾き始めた頃だろうか。ひとりの黒髪の女性が祭りの準備をする為に、会

二年後の夏祭り。

館の倉庫へと向かつてゐた。

俺は神社の境内の裏へと真っ先に向かつた。あの日以来彼女はいなくなつてしまつたが、もしかしたら…微かな思いを胸に込めて、走つていた。そして、ひらけた場所に出た。中央には、…いつも変わらない…、御神木があつた。そして御神木に触れて言つた。

「ただいま。」

祭り前日。陽が傾き始めた頃だろうか。ひとりの黒髪の女性が祭りの準備をする為に、会

館の倉庫へと向かつてゐた。

「おかれり。」

「今年で最後の夏祭りかあ…。そういうえ…ネーと…たしかに『むかーしむかし』ある村に神さまと青年が二人で仲睦まじく住んでいました。ですが、青年は流行病によ

り、この世を去つてしましました。神さまはとても悲しみ、青年のお墓に自分自身の代わりとなる苗を植え、そして神さまは流行病を止める為、神様自身が生贊となり、流行病は姿を消しました。

そのことに感謝した村人たちは、その二人の犠牲を忘れぬために、毎年、祭りをするようになりました。そして、幾百年後の、決まった期間。一人はもう一度、生まれ変わって巡り会えるという言い伝えが残つたとか。』

…、そんな事…あるわけないよね。そんな事より、花火の準備しないと！監督さん、きっとカッカしちやつてるよ…！」

夏の夜空に、また花火が上がつた。
『移り変わってゆくこの景色のなかでも、変わらぬ心のまま、生きてゆけます。この世の理

は繰り返すだけ。ただ廻り、そして巡り、いま巡る。それだけ、

終わり。

女性が会館の倉庫の扉に手を添えようとした時、倉庫の中から男の子と監督さんの話し声が聞こえてきた。

「あれ？誰かと監督さんが話してゐる…誰かいるのかな。」

……。

「監督さん。」

空蝉が泣く頃

ぶちとまと

先はもう長くないのだと、君と過ごす時間も終わりに近いのだと悟った頃には、もう風に夏の香りを感じられるような季節に差し掛かっていた。もうすぐ雨も止んで、蝉が鳴き始めるだろう。その声を聞きながら、また君と「暑いですね」なんて言い合える日は来るだろうか。

「貴方が風邪なんて珍しいですね」

上半身を布団から起こした私は君の言葉に曖昧に笑う。

若いのだから休日くらい自分のやりたいことにでも専念してくれればいいのに、君はいつもして土砂降りの中見舞いに来てくれる。それが嬉しくて、でもどうせすぐにはいなくなってしまう自分に時間を割かせてしまうことが申し訳なくて、いつも曖昧に微笑んでしまう。

「僕お茶入れてきます。寝てください」

私はありがとうと言ひながら、台所へ消えて行く君の後の姿を見届ける。君が来てくれる前の静寂が戻ってきたせいで、外の六月の大霖の音が耳を刺した。その音

が、七月に爪痕を残そうと必死になつてているようなその雨が、何とか生きようとする自分が似ていて思わず顔を蹙める。必死に健康な振りをして、明日も当たり前のように生きているんだろうって相手に錯覚させて、自分はいつたい何がしたいんだろう。傷つくのは相手だと分かっているのに。自分が、彼が好きでいてくれる自分の今まで死にたいなんて自分勝手なだけの癖に。

聞くに耐えなくて耳を塞いだ。雨に濡れる縁側が見えて、それすらも乾いて消えると思うと嫌になって目も塞いだ。塞いだつて何も変わらないのに。

気を抜くと呻き声が口から漏れてしまいそうで、唇を強く噛んだ。強く、強く噛んだいで血の味が口内に広がる。それでも、こんな声聞かせるわけにはいかない。もうすぐ戻ってしまう。早く顔を上げて、笑つて待つていないと。…ああでも、自信ないな。

じわりと涙が滲んでくる。誰にも言つたことがないし見せたこともないけれど、最近はどうも涙腺が脆弱。花のよくな雪も、舞う桜も、鮮やかな紫陽花も、これから咲くであろう向日葵も、もう見る事は無いかも知れないと思いつづくも目頭が熱くなってしまうのだ。

櫻を開ける音がする。後ろから足音が近付いてくる。

「お茶入れましたよ…って、寝ててくださいって言つたのに。…どうかしましたか？」

言葉が詰まつて出てこない。喉に空氣がつかえたように、言葉が出ない。苦しい。

この苦しさが感情ではなく病が原因だと気が付いた頃には痛みが増していく、少し気が緩めば泣き叫びそうになつていた。

顔を覗き込まれる。汚れのない瞳に射抜かれて、反射的に曖昧に微笑もうとする。でもそれはできなくて、一瞬苦痛に顔が歪んでしまう。自分を抱きしめるように両腕を掴んでいた両手が情けなく震える。

「苦しい？」

私は震える手で薬の入った筆筒を指さした。それから、「薬」と一言を絞り出す。君はすぐに察して薬を持ってきてくれた。

薬を口に含み、入れてくれたお茶を飲む。お茶が強く噛んでしまつた唇に沁みて痛い。背中を撫でる手が温かくて、無理矢理引つ込めた涙がまた出しやばつてくる。誰にでも優しい残酷な人、もつと冷たければいいのにと心の中で悪態を吐いたけれど、それでもきっと好きになるんだろうなど思つて自分を嘲笑つた。

「横になりましょーか」

その言葉に私は力無く首を縦に振つて横になる。

箇笥の中には薬が大量にある。風邪薬にしては量が多すぎる」とくらい、君も分かるだろう。何も聞かないんだな、と思ひながら見つめていると目が合つ。『感染りますよ』と苦

し紛れに言うと、「今更ですね」と笑われた。私も笑った。理由が無ければ見つめではない気がした。そんな資格はない、己の隠した秘密の重大さを噛み締める。

「死にますよ」

隠した主語は弱々しく微笑む。どうか冗談じゃないと笑つてほしい。それから、早く私を忘れて幸せにでも不幸にでもなつてしまえばいい。楽になりたい。本当は心なんてとつくに折れているのだ。

「貴方と一緒に死んでも構いませんよ」

私の自分勝手な思いに気付く素振りも全く無く、君は風邪なんかじや死にませんから丈夫ですよなんて子どもをあやすように付け足して言った。子どもなのは私の方かもしねない。何時迄も大人になれない大人。私は言つたことを後悔して、苦しさと後ろめたさを誤魔化すように目を閉じる。君はそれ以上何も言おうとはしなかった。

何か君を咎める言葉でも言えればいいのに、君があまりにも真っ直ぐに見つめてくるものだから一瞬言葉に詰まる。それでも「結婚すべきです」とやつとの思いで絞り出した声は自分も驚くほどに冷たくて、自分の心に巣食う弱さを恨んだ。

「僕は本気です。……どうか何も言わないでください」

君は蚊の鳴くような小さな声で言つて、それから決心したように立ち上がる。

「帰りますか」

私がはつきりしない意識のまま問うと、君は少し眉を下げてから、春の木漏れ日みたいに笑つて頷いた。

「なら、箇笥の一番上の段の左から二番目を開けてください。君にあげましょう」どうか気が付かないでほしい、いや、気が付いて苦しめばいい。私は曖昧に笑いながら、小さな瓶に入った金平糖を見つめる君を視界から追い出した。

雨はもうすぐ止むだろう。

部屋に静寂が訪れてから数分、私が睡魔に誘われて眠りの海へ沈みかけていた頃。体を暖かい空気が覆つて、ゆっくりと果てしなく沈んでいくような感覚を味わっていた時だつた。

ぼやけていく視界の中で君が独り言のように「結婚させられるかもしれません」と呟いた。枕元に座つた君は私を見ることなく、縁側の方を何処か緊張した様子で見ている。君からそういう話を聞いたことは一度もなかつたから、私は何処か他人事のようにその横顔を見つめた。そしてすぐに君が笑つて明日を想像した。其処には当然のように自分の姿はなくて、我儘になれなかつた自分を少し氣の毒に思つた。

「それはおめでたいですね」

眠つていると思っていたのか、少しだけ驚きと何かもう一つの感情に顔を歪めた君は、結婚なんか絶対しません」と私を見て言つた。その子どもが駄々を捏ねるような表情に思わず頬が綻びそうになつて、私は慌てて裏顔に戻す。

「あんまり」両親を困らせては…」

君が帰つた後、私は世界がやけに静かな気がして目が覚めてしまった。次に目を開じる時が最期だと悟り、身の回りの整理をしようと思つて起き上がる。自身の体は案外重くて生きるものの中の重みを今更感じた。

遺書を遺すべきか迷つて十数分筆を持つたまま悩み、結局は全て任せるという趣旨のものを簡潔に書いた。大量の本の埃を払つて、最後の晚餐のつもりで紅茶を飲んだ。

そしてとうとうその時は訪れる。

嘔吐きな人間の死に際なんてこんなもの。そう思われるような苦痛が耐えず襲つてくる。つらいとか苦しいとかそんな陳腐な言葉たちでは表せないようなものが襲つてくる。それなのに、吐血により濡れた袖も、鏡に映つた別人のように痩せた自分の姿も、なんだか無名画家の絵画でも見ているようで滑稽に思えて仕方ない。

最初から小説のように美しい死を迎えるとは思つていなかつた。だからこれでいい。畳に倒れて、目を開じた。死ぬことは怖くなつた。眠りに落ちる時と何ら変わりない感覚がするだけ。五感が少しづつ消えていく感覚も思つてはいたより怖くはなかつたし、色彩を失つていく世界は変わらず美しかつた。

後悔だらけの人生だったと思う。今更嘆いて時間が巻き戻つたとしても、私は変わらなかつたと思うけれど。きっと何度も同じ選択をして、同じ解答を君に贈つたと思う。

君にさよならを告げられるほど世界は自分には優しくなくて、薄れていく意識の中で崩壊に見える影に手を伸ばした。

「ユウさん」

名前を呼ばれたような気がして、影が君の姿を映し出す。私は思わず笑つた。これだけつらくとも最期にはこうして笑えてしまうのだから、人生というやつは案外悪くないのかも知れない。そう思わせた君はすごい人だ。なんて、幼稚な想念を置き土産に私は最期の呼吸を存分に味わう。

走馬灯なんて都合が良いものを見る」ともない実に私らしい最期は、蝉の声が連れて来た夏に散つた。

「ユウさん、ユウさん…」

僕は事切れた貴方を力無く掻きぶる。どうしてこんなこと。

やつと大量の薬の意味や寝込んだ理由が分かつたがもう遅い。貴方は虚ろな瞳で僕を見て、笑つた。ああどうして、今そんな顔をするんですか。

「僕、貴方が好きです」

言おうと思つたんです。ずっと一緒にいてほしいって。貴方の視線の先に僕はいないと分かっていたけど、それでも抱きかかえた貴方の体から力が抜けていく。その増していく重みが、失われていく体温が、今やつと瞳から零れ落ちた涙が、貴方が一度と戻らない日々に別れを告げているようで辛かつた。

「…金平糖なんて渡さないでくださいよ。期待なんか、したくなかったのに」

絞り出した声は情けなく響いて、今頃起きた蝉の鳴き声に掩き消される。

空蝉はどうとう 僕の前で泣く事は無かつた。

たがね

ちきん

飴を眺めるのは言葉では形容し難い楽しみがある。ビーノロのよう透明と溶けた鉄の様な熱さを持つつ飴特有のしなやかさと鋭さを観察するのはまるで人間を見ている様でゾクゾクする。もし昼ドラのアクターの全てが飴でも私は違和感を覚えないだろう。とはいっても現状の前にある屋台のりんご飴をひたすら見続けても時間の無駄とも言えるのだが

言い換えるのであれば底のない瓶の底を眺めることも、毛糸の切れ目の繊維をじっと見続けることでも言い換えられるのだろう。要するに全くもつて意味はないのだ。

つまり現状の前にある屋台のりんご飴をひたすら見続けても時間の無駄とも言えるのだが、気になるものを観察するのは動物の性なのだろう。いつも田を奪われ続け一十分が経とうとしている。大の大人、しかも男、さらにそこの大男がじつと見続けるものだから、店の主人は私と目を合わせようとはしない。最後のりんご飴が売れた。この店は祭りのある通りのすぐそこの場所にあって人通りは多い。しかもりんご飴なんて祭りではよく売れてしまうものだから店の主人が売り出してからたった二十分で完売してしまつた。主人が持つて来たりんご飴の数が多くなかつたのも理由の一つだろう。私は売つたことはないがなかなか羽ぶりはいいらしい。私はまだ飴を見ていたい気持ちをぐつと抑えほかの飴売りを探した。さつきいた店には

いちご飴やみかん飴がまたまだ残つてはいたのだが、そろそろ主人に通報されそうだったのだ。仕方あるまい。少し歩いて違う飴屋を探したがどうも見当たらぬ。仕方がないので近くにいた暇をうなたご焼きの屋台の主人に飴屋はないのか聞いた。どうやら少し先の小道にあるそつだ。

そのまま立ち去るうつも思ったが、流石に大人として聞くだけのはどうも申し訳ない気持ちになりたこ焼きを一つ買ってからその場を離れた。たこ焼きはそこそくまかっただあの店が売れないのは主人の顔が原因だろ。どうも表情が水から無理やり上げられた不機嫌なチョウチンアンコウの様だった。

言われた通り少し先に行くと餃屋があった。大通りとは少しそれたところにあるせいなんか

大儲けをしていい様子ではなかつた。たこ焼きを食べたせいか私はどうも甘いものが食べたくなつて今度は店の餃を観察するだけではなく買うために店に並んだ。前には一組のカツプルしか並んでなかつたので私の番はすぐに来た。そこにはキラキラと電球からの光によつて輝く餃が並んでいた。

私は小ぶりのりんご餃といちじゅう餃を一つずつ買つた。電球のせいか何なのかさつきの店で見た餃よりも何倍も綺麗に見えたので私はすぐにでも家に帰つてその餃を観察したかつた。急いで通りを出て近道のための階段を降りようとした。だが階段に足をかけて踏み出

したところで

踏み外してしまつた。階段から転げ落ちたくない一心で無理やり後ろに倒れようと

した。だが、その拍子に焦つて餃の入つたビニール袋を放り投げてしまつた。

袋は一、三段転げ落ちて一人でに止まつた。大慌てで袋を拾い上げて中を見てみると驚くことに餃の輝きはさらに増していだ。中の餃は割れていたのだ。私はついさつきまで美しい円や円錐を包んでいた餃に想いを馳せた。

その思考により生まれた感情は私欲のために罪を犯した大罪人のようななんとも甘美な気持ちだつた。



「一度きりの夏」

ナード

「今年の花火大会は例年に比べて力を入れてるんだ」と力説する彼女。そして見晴らしのいい場所に着いた時にはもう花火大会が始まっていた。そんな花火を見ていたらクライマックスが終わった後に彼女は突然「こんなことを言いか始めた。

今日は夏祭りの日だ、とは言つてもお盆の週にあるつてのはバチが当たりそ�だが大丈夫だろうか?

まあ、きっと大丈夫だろう。

今日という夏祭りは彼女の元に向かう、去年と同じように…。

去年の夏祭り、僕は幼なじみの彼女と待ち合わせをして夏祭りに行つた。

待ち合わせ場所には着物姿の彼女がいた、感想は…正直とても綺麗だと思つていた。

「へー、それだつたらいつの間にか見てるのかもな…。」
彼女少し俯いた後にいきなり大声で言つた。

「あつ…あのー…話したい」とが…ある…。」

その声はどんどん小さくなつていた。

「ん?どうした?」

気つけば花火のあがる音がしていた。

「あなたのことが…ずっと前から好きでした!」

まあそんなこともあつて夏祭りを一人で楽しんでいたらすっかり日が暮れてしまつた。
夏祭りの醍醐味とは花火大会であると言つても過言ではないだろう。

そのため毎年のように花火を見るために見晴らしのいいが誰も知らないような場所に僕達は移動した。

その瞬間最後にあがつた花火が咲いた、これまでみたことのないくらいにでかくて綺麗な花火が。

僕が言つべきことは決まつてゐた…もつとも、彼女に先を越されてしまつたみたいだが

…。

その帰り道は一人で手を繋いで帰つていた。

街はすつかり暗くなり人通りも少なかつたのを覚えてる。

そんなときだつたな事が来て……おつと彼女の元へ辿り着いたな。

そう言つて過去の思い出に浸つてゐるのをやめその場にしゃがんだ。

そして目の前の墓に向かつて手を合わせてから言う。

「ほら、来てやつたよ。」

返事はない。

「お前がいなくなつて一年か……」

しばらく最近起つたことの話題を語り続けた。

そしてその場に立ち、別れ際に彼は告げる。彼女に想いを生じた時と一言一句変わらない言葉を…。

「好きだよ、この世の誰よりも君を愛してる。」

夜散歩

いとへん

繁華街を抜けると、途端に静かになつた。

やはり金曜日の夜はみんなどこか浮かれていて、ざわざわしている。

そんな雰囲気も好きだけれど、やっぱり私は静かな場所が好きだなど思つた。
ゆっくりゆっくり地面を踏みしめる。

夜散歩。私の日課。

私の最初の夜散歩は十二歳の時だ。共働きの両親がなかなか帰つてこないので耐えられず、寂しさを紛らすために外に出た。

夜の世界は私が知つている景色とは全く違つた。暗くて、ちょっと怖くて、なのにつつても魅力的。歩き出した瞬間から、この夜に外に出るという行為に惹かれた。もっと歩きたい、遠くまで行きたい。そう思つて後の事も考えずに歩みを進めた。

・・・その後、私は男と歩いた。河川敷で空を見上げていた男と。

私は昔から警戒心が皆無で、誰も彼も見境なく信用していた。だから、あの時も自分が声をかけてほいほい一緒に歩いたのだ。何もなかつたから良かつたものの、もし悪い人だつたらと思うとゾッとする。その男とは確か三か月くらい一緒に歩いたんだと思う。男と話した内容は今でも鮮明に覚えてる。好きな物や嫌いな物、両親や小学校の先生に対する愚痴、友人と遊んだことや喧嘩したこと、自分の将来の夢まで全部詰し、聞いてもらつた。一方で男は、近代文学のことや学校では習わないような歴史人物の面白い逸話などを話してくれた。特にたくさん話していたのは蠍座のアンタレスのことだ。アンタレスは蠍座の心臓にあるとか、名前は火星に対抗するものという意味のギリシア語が由来だとか、宮沢賢治はアンタレスを心臓ではなく修羅的な生き物の身体的特徴として赤眼のさそりと表したとか、それはもう色々と。そしてその赤い星を「蠍の心臓」と呼び、空を見上げてはそればかり見ていた。

三か月で、男は私にとつて無くてはならない存在になつていた。自分の話を何でも聞いてくれて、私が退屈しないような話を沢山してくれる。その満ち足りた思い出は、温かく・・・そして少しの痛みを伴つて私の胸に現れる。物思いに耽つていると

「オネーサン」

突然、後ろから声がかかつた。来たか、今日も。

三か月ほど前からの夜散歩で遭遇する少年。恐いく十を少し超えたぐらいの齢。

振り向くと、やつぱり少年が立つていた。

「アンタも物好きよねえ。毎日飽きませず私と歩こうなんてさ」

「それ、オネーサンもじやないの？ 餓鬼のオレにつき合うとかさ」

マセガキめ。そう思つたが口には出さず、歩くのを再開させた。

この少年は、いつも私に質問をしてくる。しようもないことから答えが無いような難しいことまで。私は・・・質問に答える事が少し楽しかった。

「ねえ、オネーサンは誰かと番なの？」

前言撤回。楽しく無い時も多々ある。

「・・・んなわけないでしょ。ベーゼだつてした事ないんだから」

「ふーん」

訊いてきたのは少年の方なのに、随分興味のなさそうな返事が返ってきた。悪かつたわね、面白い答えじゃなくて。ムツとして少年の方を見ると、

「あ、あの星何！？なんていう名前！？」

急に少年が無邪気な声を上げ出した。空を指差してキラキラと顔を輝かせている。その無垢な顔に腹立たしさも失せてしまい、素直に少年が指を指している方向を見上げた。

そこには、赤い綺羅星。蝎の、さそりの・・・

「アンタレスね」

「あれがアンタレスなんだあ・・・」

「蝎の、心臓よ」

「綺麗だね」

「そりやそよう。みんなの幸せの為に輝いてんだから」

ふつと懐かしい情景を思い出す。あの日に会つた男とも、蝎の心臓の話をした・・・。

「オネーサン、時々そういう感じのこと言つてくるのはどういこと？」

少年が小馬鹿にするような目で私を見ていた。ムカつく顔だ。

受け売りよ、うけうり。昔知らないオニーサンが言つての」

あの日、私が夜散歩を始めた日。男は空を見上げていた。それを不思議に思つて声をかけたのだ。

「――――オニーサン、何してるの？」

「――――蝎の心臓をね、見てたんだ。

「丁度、今の私とアンタみたいな感じで一緒に夜散歩してたのよ。三か月ぐらいかしら」

「今は？ そのオニーサンはどうしてのさ？」

生暖かい微風が顔に当たつた。顔がこわばつていくことがわかる。

「・・・逢えなくなつちやつたのよ。もう、どんだけ歩いても逢わないの」

胸がズキズキと痛んでくる。声を上げそうになるのを必死に我慢した。

「・・・あの男と歩いたのは、とても大切な一生大事にしていきたい思い出だ。でも私が壊してしまつた――――男との、私の大切な、夜散歩の場を。自分自身の手で壊してしまつたのだ。それに気づいたとき、私はその事実に打ちのめされ暫く夜を歩けなくなつた。それぐらい、「オニーサンと歩く夜」は私の大部分を占めてしまつっていたのだ。

「とおして会えなくなつたの？ オネーサン何かやらかした？」

少年の何の穢れもないような声が心臓を驚撃みにした。なんでこんなに聴いのか。もしかしたら適当に言つただけかもしれない。それでも図星は図星だ。

「・・・まあ、ね。・・・やらかしちやつたのよ。・・・今から思えばどんでもなく馬鹿なんだけれどね、」

少年は何も言わない。私が次に言う言葉を無邪気に待つていて。

「私アンタレス嫌いって。だからもうその話しないでつて・・・言つたの」

顔が熱くなつていくのがわかつた。本当は言いたくなんかない。

――――星に嫉妬してしまつただなんて。

そんな救いようの無い感情、誰にだって知られたく無いのだ。

「そう言つた日から、会えなくなつたの？」

「うん」

返事をしつつ、あの思い出の苦い部分を引っ張り出した。もつ出すことは無いだろうと、出す機会がありませんようにと、頗つていた部分だ。男はアンタレスを見ている。

――――愛してくれたまらない、という顔をしていた。 目を細めていただけかも知れない。でも、アンタレスの事を話す声はいつだつてどんなでもなく楽しそうだつた。

本当に、救いようがないと思う。

勝手に星相手にモヤモヤとした感情を抱いて、その拳句にオニーサンにあたつた。

そんな自分本位な餓鬼と歩きたいとは思わないだろう。それでいて次の日も同じように歩けると信じて疑わなかつたのだから酷い。

「その所為じゃないと思うよ」

少年の声がした。とても、凜とした声だつた。私は一瞬固まつた。

「大丈夫、オネーサンの話を聞いてる限り、そういう事で夢想尽かすような人じやないからさ。」

「なんでそんなこと、わかるのよ」

思わずやさぐれた声が出た。やめろみつともない！と頭の中で叫ぶ自分がいたが、止められなかつた。だつてそんなの、ただの慰めにしか聞こえない。実際男とは違えなくて、

それは私がアレを言つた次の日からなのだから。

「なんで、そんなこと・・・」

「だつてオネーサン、優しいじやん

・・・・・え？」

随分と間の抜けた声が出た。思わず少年を凝視する。彼の目は真剣そのもので、憐れみも同情の色も全く浮かんでいなかつた。

「絶対そのオニーサンには分かつてたと思うよ。オネーサンが優しい人だつてこと。優しい人をわざわざ手離したい人がいると思う？・・・きつとオニーサンは夜散歩をやめざるを得ない理由が他にちゃんとあつたんだよ」

慰めには聞こえなかつた。論理的ではないのに、何故か欠けたものが埋まるような充足感があつた。そして、この少年は私を優しいと言つた。それが嬉しい。

「そつか」

「そうだよ。オネーサンが悩むことないよ」

そう言い放つた少年は、とても男前だつた。まじまじと少年を見る。そういえばちゃん

と彼を見たのは今日が初めてだ。細くて可愛らしい顔つき。どう頑張つて見てみても、子供だつた。

「オネーサン」

少年がゆつくり口を開いた。先程とは打つて交わつて静かな声だつた。

「星、綺麗だね」

「そうね」

赤く輝くアンタレス。黒い夜空を彩る星々。皆んな綺麗だ。

「俺、もう帰らなくちゃ」

不意に少年が身体の向きを変えながら言つた。――――その姿は、なんだか少し寂しそうだつた。咄嗟に、何か言わなければいけないと思った。この子が寂しい思いをしているのなら、何か言ってあげないと、と。だが結局何を言って良いか分からず、声は出せなかつた。

彼は走り出そつとする時、「俺さ、オネーサンが思つてるほど純粹無垢な子じやないよ」 そう言つて、ニイツと八重歯を見せて笑つた。そして、私に喋る暇も与えずに駆けていつた。

強い風がひとつ、びゅうんと私の髪を舞ひながら通り抜けた。

もう、あの少年には会えないんだろうな。

そう思つた。何故かは分からない。しかしそれは妙に確信を持つて私の胸に響いた。

私がいくら夜散歩をしようとも、会うことはない――――

・・・あの少年も、私と一緒に夜を歩いたことを覚えていてくれるだろうか。私があのオニーサンと歩いたことを懐かしく思っているように、大事な思い出として残しておいてくれるだろうか・・・。

「ありがとう」

お腹が、ぽかぽかしている。

言葉では言い表せないほど、満足足りた。

夏の、風ひとつない日。夜の河川敷に男が立つていて、空を見上げていた。

男の目線の先には、赤い星、アンタレスがあった。

「オニーサン、何してるの？」

突然、後ろから声がかかった。男が振り向くと、そこには十を少し超えたぐらいの少女が不思議そうな顔をして立っていた。

男は眉毛を片方あげて少女を見ていたが、やがて優しい表情になり――――――

「夜散歩だよ」

そう言って、一イツと八重歯を見せて微笑んだ。

「蝎の心臓をね、見てたんだ」



妹に嘘をついてしまい、目を合わせられることができなかつた。ふと、母を見る。いつもの笑顔のままだ。何も変わらなかつた。もう覚悟を決めようと、母に話そうちした、その時だつた。玄関から大きな声が響いた。

※この話は戦時中を中心にしています。苦手な方は注意してください！

「…ただいま…」

戦争から一次帰宅した陸風(りく)は、前までは軽かつた重々しい玄関の戸を開ける。そこには、2年ぶりくらいに会う妹の秋桜(もみじ)がぽかんとした顔で彼を見ていた。

「りく、おにい…あま？」

たまたま玄関の近くにいた妹が、彼の存在に気付き騒ぎ始めた。

「おにーさまだ！母さまー！おにーさま帰ってきたんだわー！」

台所の方から、どどどと母が玄関に向かってくる足音が響く。

「母上…。」

「…陸風。おかげりなさい…。よくゞ無事で…。」

母は涙目で、彼の手を握つてくるもので、彼自身少し動搖したが、笑顔で答

えようと作り笑いをした。

「…、はい。ただいま、戻りました。母上。」

茶の間で卓を囲みながら団欒の時間を過ごしていた。

「そうですか…。そんなことが…。大変だつたでしよう。」

「いえ、御国への為です。」

「おにーさまー！おにーさまは空軍じゃんね！飛行機つてどうやの？？速い？

楽しい？？」

妹のその無垢な質問にひどく動搖させられていた。まだ戦場で人を殺めないと、感触が忘れられないからだ。

「…、つ。そ、そうだな。今度、帰ってきたら、話してやる。」

『あの…！陸風さんはいらっしゃいますか！？』
母は、くすつ、と笑つて、行つて来なさい。と彼に言つた。よく分からず、玄関へと足を運んだが、少し言葉が詰まつた。

「…はい。…どうしまし…た。」

「あ…お、お久しぶり…です。」

玄関先に立つてゐたのは、彼の幼馴染である十海さんだつた。

「十海さん。お久しぶりです。」

「あ…帰つてきたなら、私のところにも挨拶をしてほしいです。」

少しむすつとしていたようだつたが、彼女の前だと、どうしても表情が緩んでしまうようで、久しぶりに笑顔で答えた。

「ええ。今度からそうしましょう。」

「…ふ、あはは…。」

「…？何かおかしなことでもありましたか？」

「いえ、変わつてませんね。あなたも。昔からずっと。」

変わらないという言葉に少し違和感を覚えた。

「…。そうでしたか。…、少し男前になつたと思つんですが？」

あまり悟られないよう誤魔化した。

「くす、そうですね。男前です。」

「あはは。すまん、玄関に立たせているのもなんだ。入つてください。妹も

いますが。」

「ええ、いつもお世話してましたから。あなたがお勧めしてる間にも。」

「ははは。それは大変だつたでしよう。さ、どうぞゆっくりしていつて。私は少し用事があるので庭に出ますね。」

……。彼は部屋から出ると早足で庭へと向かい、膝をつき、呼吸を整えようとした。

「……つ。はあ・はあ・ひ。覚悟は決まつてゐるのにな…。はは…。」

彼の手には、一枚の志願書が握られていた。

「…うそ…、そんな…。」

影で全てを見ていた十海は全てを悟つたが、信じたくない、そう言つた嗚咽が漏れた。

「すまん。思つた以上に手間取つた。」

「え、ええ。大丈夫ですよ。」

窓の夕陽を眺めて、十海は目を合わせようとはせず、彼に話を続けた。

「それより…すみません。少し身体を預けても、いいですか？」

「あ、ああ。」

「……。ありがとうございます。」

十海は涙を堪え、必死に目を瞑つたが、少し涙が溢れ、陸風の服に沁み消えていった。

彼はどこか懐かしいような顔をして呟いた。

「……つ。はは、いいものだな。」

十海はその独り言に対し、静かに答えた。

「はい。」

露けし窓に、宵闇が近づく…、陸風は十海を見送り、また母がいる台所へと向かつた。

「母上、十海さんから甘味物をいただきました。一緒にどうですか？」

「あら、いいですね。お茶を用意してきますね。」

「あ、それなら私が…」

「いいのいいの。」

立とうとした彼を、少し乱暴に止めた。その目は一人の母親としての、義務を果たそうとする強い意志が感じられた気がした。

「あなたに、少しでも母らしいところを見せてあげたいから。」

「……? そ、そういうことなら…。」

「それに…。あなたがいつもお茶を用意しちゃうせいだ、どこに何があるか、忘れてしましますもの。」

「あら、ほんと。美味しい。…でもあなたは、甘いものはお嫌ではありませんでしたか？」

「ええ。ですが、美味しいか、不味いかの区別ぐらいはあります。」

「それもそうね…。」

「…。」

彼は少し満足したかのような気がした。これが最期の親子の会話だが、母には良い思い出になつただろうと思つたからだ。

「…。」

そんな時だった。不意に母が声を掛けってきた。

「ねえ…。」

「むつ…?」

「今度のお勤で、散りに行くのですか？」

彼は酷く驚いた顔をしたと思うと、少し体を揺さぶらせながら、途切れ途切れに諂魔化しの言葉を並べた。

「つ…。わ、私には何のことか…」

彼は、そう言いつつも、内心では母を騙せるはずもないですか、と諦めに近い感情を抱いていた。

「もう、いいのですよ。隠さなくて…。」

「…。どうして…、母上は、何も言わないんですか？」

「あら、どうして我が子が決めた道をとやかく言えるのでしょうか。それに、頑固な息子と娘がいますもの。母として心配でならないわ。」

「つ…。私は…母上の…」

「今までよく頑張りましたね…。もう、我慢しなくてもいいのですよ。」
堪えろ…なんの為に今まで…、という彼の気持ちが母の言葉により、どんどん砕けていくのが分かる。

「ははうえ…。母上…！」

目の前が滲み、いつの間にか、今まで枯れていたはずの涙がポロポロといぽれ落ちてきた。

母はそれを優しく抱擁し、幼子を慰めるかのような優しい口調で言つた。

「ええ、今はお泣きなさい。それは決して恥ずかしいものではありませんか

ら…。それを笑う者は私が許しませんから、いいえ、笑わせるものです

か。」

…………。

翌朝。

「では、行つて参ります。」

「ええ。気をつけて。」

そして家から背を向けようとした時だつた。背後から秋桜が何かを握りながら呼びかけてきた。

「陸風兄さま…！」

「秋桜…。どうしたんだい？」

「これ、作つたんだけど、お守り…なんだけど…。」

その手に握っていたのは小さな、お守りを模したようなヘンテコなお守りだつた。

「ああ、ありがとな…。それでは母上、秋桜…。いって参ります…。秋桜、

いい子になるんだぞ。兄さんからの頼みだ。」

「兄さま…。また…会えるから、さよならは言わないよ…。ほいじやあ…行つてらっしやい…」

「行つてらっしやい…。陸風。」

彼は何も言わずに頭を深々と下げ、その場を後にした。家を出て、間もなくのところで、十海が息を切らして彼の元へ向かつてきた。

「待つてください…！…はあ…はあ…ぜえ…」

「十海さん…。どうしたんですか。」

「い、いつもいつも言つているでしよう…。挨拶の一つぐらいして下さいって…！…ぜえ…ぜえ…ふう…」

十海は息を整えながら聞いた。

「は、ははは。そうでしたね。それより汗だくですよ。えーと…、あ、ちょ

うじ布がありますね。これ使つてください。」

「あ、ありがとうございます。ふう…。」

「では、」

何事もなかつたかのように歩き出した彼を、かなり強引に引き止めた。

「では、じゃないです…！…すぐ話をそらして逃げるんですよ。あなたは…！」

「バレましたか…。それでどうしましたか？」

「…素因気が台無しです…まったく。あなたつて人は。第一ですね、始めて会つたあの日も…――」
十海はついに過去の話までしてきてが、陸風はそんな彼女を愛おしく感じ、抱き寄せた。



「むぐつ……な、なんですか？突然…。」

「十海。ありがとな…、お前といた日は、とても楽しかった。」

陸風のその言葉に、十海はしばらく震えながら、言葉を練り出した。

「ば、馬鹿あ……嘘つき……！」

十海は強がっていたが、涙を堪えることができずに、彼の服を強く、握りしめた。

「は、はは…すみません。そうですね。私は、嘘つき、ですね。」

陸風と十海は互いの手を取りあつた。

「きっと、また…逢えますか？」

陸風は少しの沈黙の後、微笑みかけて答えた。

「…………願っていれば、逢えますよ。」

「…………はい。」

憐い約束に袖を振り、十海は立ち止まり、陸風は前へと向かつた。

「あ、その布は大事なものなので、今度返してくださいね。」

終戦から7ヶ月。三月だが、まだ桜は咲かず雪が少し残っているような春だった。

その日の夜も、十海はずつと陸風の帰りを待ち続けていた。その手には一枚の布が握られていた。

「…、どこに、いるのかな。」

窓際のちやぶ台で外を眺めていると、暖かい風が流れてきた。

「ふあーあ。今日はなんだか、暖つたかいなあ…。眠たく…な…うて。」

そして、意識が遠のいていく時だった。

「きる…起きる…。起きる、十海。んんっ！起きなさい。」

「んん…？り…く？…り、陸風！？」

「と、なんですか。お化けを見たような顔して…」

「なんですかじやないですよ！ずっと、ずっと待つていたのに！」

「…?何言つてるんですか…。私はあなたの傍にずっといたでしょ…に…」

「え…？」

「そつか…。悲しい思いをさせてたんだな。」

「う、うん。うん！ずっと、ずっとずっと。待つていたんです…」

「つ…………」

「あ、あのね。秋桜ちゃんが看護師になつたの。毎日忙しいんだって、秋桜ちゃんも、あなたの帰りを待つて…それに…」

「…………」

「あ、あの…。ど、どうして黙つているんですか？…あ、あれ、変だな…。体が動かないや…。陸風、もつと顔を…」

陸風は十海が握つていた布を手に取り、にこにこと笑いながら言つた。

「これ、返してもらいますよ。」

「あつ…」

「やつぱり、これがないと手元が寂しいんですよ。」

日の光が照らし付け、眩しさを覚えた十海は身体を伸ばしていた。

「んん…？ツ、陸風！？…ゆ、夢？」

辺りを見渡し、立ち上がり窓際まで寄ると、暖かい風が吹きつけた。共に、羽織がふあさ、と肩から落ちた。

十海は見覚えのある羽織を手に取り、首を傾げた。

「あれ、これ、陸風の、羽織？」

窓から一枚の桜の花びらがひらひらと舞い落ちた。外を見ると子供達が桜を

見てはしゃぎ回つていた。

「陸風…。…そうなんですね。来てくれたんですね…」

頬から涙が溢れたが、微笑んでいた。

「今度は、もう逃がさないから。」

おわり。3年間、お世話になりましたあ～

〔俳句〕

おひさま

息白く

はつちやけ落葉に

冬の虫

秋の風

お供はいつも

竹ぼうき





あらすじ ネコキングの政治体制にはミルクスもビトラーも四島由紀夫も感心してしまった。

2

(おとかゆたらあがんで)



(おと少女ミリリン)



データどこに保存したか忘れたし部誌もどつかいつたから最初のほうのネコキングを見返せない



3

蜘蛛が泣く



ハハコノアイシをやつづけてー

最恐！ネコキング



オハホー！ネコキングもあり

補遺

筆走り 逆に口は 止まつてゐる

本当は口を 走らせたいな

よみひとつひ

笑い声

僕とは対の

関係で

涙が僕の

そばにようそづ

前見えぬ 後ろ見たとて 後悔が

なにをしようか 今をも見えぬ

下を向く いつもと変わらぬ

この景色

横を向いたら 笑顔な君が

諦める この先なにが 起るのか 予想がつくから それ避けるんだ

首絞める この世を離れる 覚悟した

でもいつも のうのう生きている

雜音が 本読む僕の 邪魔をする みんなの会話 うるやましいな

紙べラリ すらすら解いてく 問題を 僕は解けずに 前髪べラリ

編集後記

「」の度は文芸部の部誌を手に取つていただき、誠にありがとうございました。気に入つた作品は原のかりましたか？ 今回の部誌のテーマは「夏」でした。此処には様々な夏があつたと思います。貴方が味わつた「とのない」ような夏を、「」でお楽しみいただけた嬉しいです。「これからも文芸部は、貴方がふと手にしたくなるような部誌を作り続けていきます。読書週間などで何を読めばいいか迷つたら手に取つてみてください。

実は比叡山高校のホームページからも部誌（「」の後書きが書かれた時点では2021秋号）が読めるんですよ。是非覗いてみてくださいね。そして新入部員はいつでも歓迎しています、あそびにくるだけでも是非。

部長